

本会顧問 岩井武俊氏を悼む



本会の草創期にあたる明治四十二年一月より大正三年十二月に至る間、書記として庶務一切を担当した顧問岩井武俊氏は、本年一月十六日午前六時二十分、京都市左京区下鴨泉川町一番地の自宅で逝去された。哀痛の極みである。ここに氏の略歴と業績を記して追慕のよすがとしたい。

岩井氏は大阪毎日新聞社の記者として、ことに昭和二年から十

五年間その職にあった同社京都支局長として名声を馳せた人であり、さらにまた、その後の二十数年間文化人としての功績顕著な人であるが、まずその少壮時代考古学者としての活躍振りについて記さなければならぬ。本会との関係は実にその頃に始まるのである。

氏は明治十九年七月十九日、京都府相楽郡川西村大字下狛百四十一番戸に生れた。三十五年(十六歳)京都府立師範学校に入學したが、病気のために翌年九月中途退学のやむなきに至った。しかし、向学心に燃える氏は、専ら早稲田大学講義録によって勉学につとめ、三十八年九月、同大学歴史地理科校外生卒業、同年十二月には小学校准訓導の免許状を受領した。しかもその学力を認められ、三十九年十月には京都府教育会附設小学校教員養成所歴史及地理科の教員を委嘱せられた。若冠二十歳である。この時期はまた、岩井氏が考古学者としてその存在を知られた時期でもある。

氏が『考古学雑誌』の前身『考古界』五の一雑録の欄に「山城国相楽綴喜両郡の古墳」と題した報告文を発表したのは実に三十八年九月のことで、以来同誌五の二(明三八・九)雑録の欄に「山城相楽郡棚倉村古墳及和伎、綺に就きて」および、彙報の欄に「山城の石棒」、五の三(明三八・十一)資料及報告の欄に「山城国相楽郡西部古墳」、五の七(明三九・一)同欄に「山城国久世郡久津村字平川の古墳」を発表している。そして五の九(明三九・三)には、

論説及考証の欄に「蟹満寺及庵光明寺につきて」を発表し、以後、主とし京都府下の古墳寺院址等についての報告文をほとんど毎号発表している。東山將軍塚附近の古墳について喜田貞吉博士と論戦を交えたのも同誌上においてであって、明治四十一年から四十二年にかけてのことであつた。これは喜田博士の平安初期説に対して奈良朝以前説を堂々と主張したものである。なおこの頃、氏は薨堂^{ゴウドウ}という別号を用いている。周知の如く、のち淮南と号したが、それは内藤湖南博士にあやかり、その生地になんだものである。氏が内藤、黒板勝美、喜田、浜田耕作諸博士の知遇を得たのもこの頃からである。直接にその門を叩いて教えを乞うたこともあるが、本会創設者の一人増沢長吉氏(当時京都師範教頭)が紹介の労をとつたことも少なくなかつたという。そして、氏が本会初代書記として役員に列したのはこの増沢氏の委嘱によるのである。

史学研究会は大正五年一月『史林』第一号を出すまでに『史学研究会講演集』第一―四冊と、『史的研究』、『統史的研究』を発行しているが、岩井氏は講演集第二冊(明四二・九)から第四冊(明四五・四)までの編集にあたり、庶務をひきうけ、献身的な活躍をせられた。昭和二十九年、本会が氏を名誉会員に推し、昭和三十七年改組とともに顧問に推薦したのは、この時の功勞をたたえたものである。

明治四十五年(二十六歳)一月、教員養成所をやめた岩井氏は、島津製作所に入社して、標本部に勤務した。ここで氏は考古学関係の標本模型の作製を指導したのである。大正二年七月、島津製作所より出刊した『古代の遺物遺蹟』一冊は、岩井氏の編著書の第一号である。考古学概論であるとともに、同所発売の標本模型の解説の目的をも含めて書かれたものである。この頃、岩井氏が丹精をこめた業績は、皇陵図絵である。これは喜田博士の主催する日本歴史地理学会の企画になり、全国の皇陵を实地踏査してそれを名所図絵のような形で出そうとしたものである。岩井氏は、後輩にあたる当年の梅原末治博士を伴い、大正二年三月より約三ヶ月を費し、全国の皇陵を巡拝してこれを写生した。それは巻紙七十二尺におよぶものであつたが、しかし、惜しくも、ついに発刊の機に恵まれず、のち、梅原博士によって皇陵案内記の部分が印刷になったのみであるという。

岩井氏の記者生活は大正三年一月から始まる。大阪毎日新聞社に入社した氏は、早速御大典に関する記事を担当した。適材適所を得たわけである。その後は、政治関係と、史学、考古学関係の記事を担当した。政治記者としても随分有能で、すぐれた記事を多く書いているようであるが、今はふれない。当時の毎日新聞社々長の本山彦一氏は考古学を愛好し、古物の蒐集家として知られた人である。本山社長は岩井氏を得て喜んだが、岩井氏もまた本

山氏の下で大いに驥足をのばすことができた。大正六年、毎日新聞の後援により、鳥居龍藏博士が近畿各地の石器時代の遺蹟の調査を行なったが、岩井氏は始終行をともして発掘調査に協力し、その模様を同紙上に詳細に紹介発表した。ことに、同年十月より行われた大阪府南河内郡道明寺村字国府の遺蹟の調査は、岩井氏が毎日紙上に連載したもののほかには記録が残っていないという。しかもその記事は、単なる報道の域にとどまるものでなく、自ら作製した実測図を載せ、達意、正確に自説を開陳しており、考古学者としての岩井雅南の面目躍如たるものがある。なお、大正七年には和歌山県史蹟調査保存委員会委員を委嘱せられている。

岩井氏の研究は古建築の方面にもおよんだ。大正六年より同一年まで、全国各地において特別建造物を歴訪し、その全部について新しく撮影し、これを毎日紙上に紹介した。大正九年より十一年十一月にわたって高木利太氏との共著の形式で刊行した『日本古建築菁華』三冊はその集大成で、図版のほかに、各建築の創立沿革をはじめ、その構造様式、手法および特徴を詳記し、且つ社寺の縁起由来を説き、中には伽藍の配置、各時代における様式特質等をも解説している。高木氏は毎日新聞の専務取締役で、出版の経費を負担した関係で共著の形式をとったのだという。

毎日新聞社では累進して大正十一年十二月政治課長、十二年十一月内国通信部副部長、十三年社会部副部長、十四年八月出版部

兼務。その間、大正十二年にはシナ各地の名勝、史蹟、古美術を視察、十五年六月より昭和二年六月まで、欧州各地の博物館、美術館、大学、研究所等を視察して見聞を広めた。そして昭和二年五月、京都支局長を命ぜられたのである。それはやがて行われるべき即位大礼に備えた人事であったというが、これは岩井氏にとって絶好のポストであった。以来、十六年七月年齢満期に至るまで十五年間、本社への転動を辞退しつづけてその職にあった。この間において岩井氏は、前記諸先生やさらにその次代の諸先生方と文雅な交わりを結ぶことができた。また、三高教授であった中村直勝、藤田元春両博士らとタイアップして定期的に臨地講演を行ない、歴史、美術の啓蒙活動に大きな成果をあげたものである。自分自身でも、昭和三年、即位諸儀式等について明確な解説を施した『御大典』を執筆刊行した。また、昭和六年と九年とは、『京郊民家譜』、『続京郊民家譜』の大著を出している。氏は昭和五年から六年にかけて、京都市およびその近郊の一般民家を記録保存する目的で自ら探査撮影したものを毎日紙上に連載したが、これを集約したものが前者であり、未登載の部分をまとめたのが後者である（なお昭和二十二年、上記正続両篇をまとめて『京郊民家譜』として発刊）。『古建築菁華』といい、『京郊民家譜』といい、全く精力的な著述であり、その価値は今日なお専門家の間に高く評価せられている。論者を紹介したついでに附記したいのは、岩井氏

が口述を筆記したものがもととなって刊行せられたものに、富岡謙蔵氏の『四王呉僮』、内藤博士の『支那論』、犬養毅氏の『木堂翰墨談』等がある。

定年(満五十五歳)で退職した岩井氏は、毎日新聞社友、京都支局顧問となった。他所から招聘の話もあったらしいがこれに応ぜず、毎日の岩井さんとして終始し、京都の土地を愛し、京都に住むすぐれた人々との交りを大切にしながら、一市民として京都住まいをつづけた。しかも最後まで毎日支局長としての格式をもちつづけたのはさすがであると評せられた。引退後岩井氏がもっとも骨を折ったのは、『京都市史』編纂事業である。昭和十六年十二月、編纂事務局顧問を嘱託せられ、のち編纂委員会委員、また編纂事務を嘱託せられて二十三年五月に至ったのが、戦争中から戦後の困難な時期にあつて、適切な指導と助言を惜まず、事業の推進に傾注した。また、東方学術協合理事、京都国立博物館非常勤嘱託、ユネスコ協力会理事、京都市社会教育委員、市民憲章推進委員等の役職に就き、その声望と識見とをもって各界を裨益した。また、柳宗悦、浜田庄司、河井寛次郎諸氏らと京都民芸協会を設立したり、京都国立博物館の後援団体である清風会の組織に當ったりしたのを始めとし、岩井氏の尽力、奔走によって誕生し、発展した団体、集会は非常に多い。メンバーになっている団体も多く、毎日どこかの会に出席のスケジュールがぎまわっているとい

う有様であったが、しかも、どの会合においても、常にその中心的存在であった。あの堂々たる押し出し、齒に衣をさせない談論ぶりは、四周を圧するものがあつた。剛胆な一面甚だ細心で礼儀正しく、氏が諸先生方に対して示した尊敬の態度は、我々後進に奥ゆかしさを感じさせずにはおかなかつた。後輩に対しては敵しい反面に情義が厚かつた。毎日新聞において氏の門下から多くの人材が輩出したのも故あるかなである。稀にみる読書家で、博覧強記、歴史上の件名などは全く掌を指すが如く、ものをうる覚えしかしてない若い学者を圧倒した。古文書に造詣深く、宸翰類の蒐集に熱中したこともある。自らも書をよくし、行儀のよい、風格のある楷書を書いた。酒は全くたしなまなかつたが、美食家で、食通をもつて任じた。健康には慎重過ぎるほどに気をつける人であつた。信頼していた伊沢為吉医博の逝去によつて、健康保持の指針を失つたと嘆いていられたが、とくにここ数年間心筋梗塞の兆候があり、時々ある期間自宅で静養することによつて元気を回復するということを繰り返した。今年元旦、少々の不調をおして、恒例となっている伊勢参宮を敢行せられた。今年が四十九回目だという。そしてその後十余日にして、脳溢血で亡くなられたのである。享年七十八歳。

告別式は二十一日、北区紫野上野町光念寺において学者支局長にふさわしく盛大に挙行せられた。(遺影は昭和三十三年五月比叡山延暦寺根本中堂前において)

(外山軍治)